

第十一章 方法論

方法論(methodology)とは、人間がいかにして客観的な真理に到達することができるかを論ずるものです。実際、方法を意味する英語の method は、ギリシャ語の meta(従って)と hodos(道)に由来しています。したがって method(方法)とは、何らかの目的を達成するためには、一定の道に従わなくてはならないことを意味しているのです。

古代ギリシャ以来、今日まで多くの哲学者が、それぞれ特有な方法論を展開し、事物の道理を探究してきました。ここではまず従来の代表的な方法論の要点を紹介し、次に統一思想における方法論すなわち統一方法論を提示します。そして従来の方法論を統一方法論の立場から論評しようとするのです。

ここで一つ付け加えることは、認識論や論理学の場合と同様に、従来の方法論の内容を具体的にまたは学術的に紹介しようとするのではなく、ただ従来の方法論がもっていた問題点に対して、統一方法論が解決しうることを明らかにするために、その要点だけを紹介するということです。

一 史的考察

ヘラクレイトスの弁証法(運動法)

ヘーゲルによって弁証法の創始者といわれたヘラクレイトス(Herakleitos, ca.535-475 B.C.)は、宇宙の根源的な物質(アルケー)を火であると考え、火は絶えず変化しつづけると見ました。また「万物は流転する」といって、固定不動のものはなく、一切のものは生成と運動のなかにあると見ました。彼は「戦いは万物の父であり、万物の王である」という観点から、万物は対立と闘争によって、生成し、変化していると考えました。そのようにヘラクレイトスが万物を生成、変化、流転という側面から扱ったという点で、ヘーゲルはその方法論を弁証法と呼んだのです。しかしヘラクレイトスは生成、変化の中にも、不変なものがあるといい、それがすなわち法則であって、「ロゴス」と名づけました。また彼は、闘争を通じて調和が生じるといいます。

ヘラクレイトスの方法論は、自然の存在のあり方と自然の発展に関する見方をいうものです。それは事物の動的な側面をとらえるようにするものであるので、その方法論(弁証法)を運動法ともいうことができます。

ゼノンの弁証法(静止法)

万物は流転するというヘラクレイトスの主張とは反対に、エレア学派のパルメニデス(Parmenides, ca.515 B.B. 生)は、存在は不生不滅であり、不変不動であるとししました。そして、パルメニデスの思想を受け継いだエレアのゼノン(Zenon, ca.490-430 B.C.)は、運動を否定し、ただ静止している存在だけがあることを論証しようとした。

物体は動いているように見えても、実は動いていないということを論じた四つの証明がありますが、その中の一つが「アキレスは亀を追いこすことができない」というものです。アキレスはトロイ戦争に功労を立てた英雄であって、非常に足が速いのですが、決して亀を追い越せないということです。亀が先に出発して、一定の地点にまで進んだとき、アキレスがその後を追いかけたとします。アキレスが亀がいた所に着いたとき、亀はすでにいくらか先に進んでいます。さらにアキレスがそこに着いたとき、亀はすでにさらに少し前に進んでいます。したがって、常に亀はアキレスより先にいるということです。

もう一つの証明が、「飛ぶ矢は静止している」という飛矢静止論です。A点からC点を目指して飛んでいる矢があるとします。そのとき矢は、AとCの間にある無数の点B1、B2、B3……を通過します。ところがB1、B2、B3……という点を通過するということは、それらの点で一瞬、止まることを意味します。ところがAとCの距離は無数の点の連続であるので、飛ぶということは静止の連続すなわち静止の永続となるのです。したがって矢は運動せず、静止しているのです。

ゼノンの方法は、相手の主張を認めるとすれば、その主張にどのような矛盾が生じるかを問答式に問い詰めることによって、相手の主張の誤りを暴露してゆく対話術でした。

アリストテレスはゼノンを弁証法の創始者と呼びました。運動を否定して、ただ静止する存在があるということを説明しようとするのがゼノンの弁証法であるので、その弁証法を静止法ともいうことができます。

ソクラテスの弁証法(対話法)

紀元前5世紀の後半、民主政治が発達したアテネでは、多くの青年たちが政治上の成功すなわち出世のために弁証法を学ぼうとしていました。そこで青年たちに弁証法を教えることを職業とする人々が現れるようになりましたが、当時彼らはソフィストと呼ばれました。

初期のギリシャ哲学自然を研究の対象と見なしていましたが、ソフィストたちは自然哲学から視線を転じて人間の問題を論じました。ところが自然現象は客観的、必然性をもっているのに対して、人間に関する問題はみな相対的であって、主観によって各人の解釈は異なるという相対主義や、その解決をあきらめる懐疑主義が生じてきました。ポリス社会のあちこちで歩き回っていたソフィストたちは、行く場所ごとに価値評価の基準が異なることを目撃し、人間に関する限り、真理は存在しないとまで主張するようになったのです。そして彼らの教える弁論術は、のちには、いかに相手を論破するかという方法のみを重んじるようになり、そのためには詭弁までもためらわずに用いるようになったのです。

ソクラテス(Sokrates, 470-399 B.C.)は、そのようにソフィストたちが人々を惑わしているのを嘆き、重要なのは、政治的な成功のための技術的な知識ではなくて、真に人間として生きていくための徳であると主張したのです。そして徳が何であるかを知ることが真の知であるとしたのです。ソクラテスは、真理を得るためには、まず自らの無知なることを知らなくてはならないとして、「汝自身を知れ」と叫びました。そして謙虚な心で人と人が対話することによって、真理に到達できると主張したのです。そのとき、特殊な事柄から出発して一般的な結論に到達するようになるといいます。

ところで対話を通じて真理に到達するには、まず質問をしてきた相手の魂の中に眠っている真理を対話によって呼び覚まして、それを導き出さなければならないといいます。ソクラテスはそれを産婆術といいます。ソクラテスのこのような真理探究の方法は、弁証法ないし対話法(問答法)といわれています。

プラトンの弁証法(分割法)

プラトン(Platon, 427-374 B.C.)は、師のソクラテスのいう徳に関する真の知がいかにして成立するかを論じました。そこでプラトンは、事物をして事物たらしめるところの非物質的な存在が先に存在しなくてはならないと主張し、それをイデアまたはエイドスと名づけました。そして多くのイデアの中で善のイデアを最高のものとし、人間は善のイデアを直観するとき、最高の生活を送ることができるとしたのです。

プラトンによれば、真に実在するものはイデアであって、感覚界はイデア界の影にすぎないのです。したがってイデアに関する認識こそ真なる知であり、イデアに関する認識の方法を彼は弁証法と呼びました。

プラトンの弁証法は、イデアとイデアの関係を決定し、善のイデアを頂点とするイデア世界の構造を明らかにしようとするものでした。イデアの認識には、普遍的な類概念を種概念に分割(分析)していく、上から下への方向と、個別的なものを総合しながら最高の概念を目指す、下から上への方向の二つの方式があります。そのうち総合の方向はソクラテスの弁証法と一致するものですが、普通、プラトンの弁証法というとき、分割の方法をいいます。

ソクラテスの場合、人と人との対話によって真なる知を得ようとするのですが、プラトンの弁証

法は概念の分類の方法であって、思惟が自ら問い、自ら答えていく、思惟自身の自問自答であつたのです。

アリストテレスの演繹法

いかにして正しい知識が得られるかという課題に関する理論を、アリストテレス(Aristoteles, 384-322 B.C.)は、知識についての学、すなわち論理学として体系化しました。「オルガノン」(Organon)としてまとめられている論理学は、正しい思考によって真理に至るための道具であって、それは語学への予備学であるともいわれています。

アリストテレスによれば、真の知識は論証によるべきであるというのです。彼は特殊から普通に進む帰納法も認めていましたが、それは完全性に欠けるとして、普通から特殊を演繹する演繹法こそ確実な知識を与えるとしたのです。その基本となっている形式が三段論法です。三段論法の代表的な例は、次のようなものです。

すべての人間は死すべきものである。(大前提)

ソクラテスは人間である。(小前提)

ゆえにソクラテスは死すべきである。(結論)

アリストテレスの論理学は中世において、神学や哲学の諸命題を演繹的に証明するための道具として重要視されました。そして約二千年間、アリストテレスの三段論法はほとんど変更なく広く認められてきたのです。

ベーコンの帰納法

中世を通じて超越的な存在としてされていた神様は、ルネサンスに至り、次第にその超越的性格を失ってゆきました。そればかりでなく、神様を自然の中に内在する存在としてとらえる汎神論的な自然哲学が生じたのです。そのような中世時代が終わり近世が始まる時期に、一人の哲学者が出現して、自然の探求をいかにすべきかという自然研究の新しい方法を提示したのです。それがフランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)でした。

ベーコンによれば、過去の学問は「神様に身を捧げた修道女のように不妊であつた」のであり、それは主としてアリストテレスの方法を用いてきたからであると考えたのです。

アリストテレスの論理学は、論証のための論理学であつたのですが、そのような論理でもって、他人を説得することはできても、自然現象から新たな真理を導き出すことはできないとしたのです。そこで新たな真理を見出す論理として提示したのが帰納法であり、彼はアリストテレスの「オルガノン」に対抗して、自己の論理学を「新オルガノン」(Novum Organum)と名づけました。

アリストテレスの論理学を根拠としている伝統的な学問は、ただ無用な言葉の論争にすぎないとして、ベーコンは、確実な知識を得るためには、まず私たちが陥りやすい偏見を取り除いて、自然そのものを直接に探求しなくてはならないと主張したのです。その偏見に四つの偶像(イドラ)があります。種族の偶像、洞窟の偶像、市場の偶像、劇場の偶像がそれです。(「認識論」を参照)。そのような偶像を取り除いたのちに、純粋な精神でもって、自然に対して実験と観察を行い、そこから個々の現象の中に潜んでいる共通の本質を見出さなければならないのです。

ベーコン以前にも帰納法はありましたが、以前の帰納法が少数の観察と実験から一般的な法則を導こうとしたのに対して、ベーコンはできる限り多くの事例を集めること、反証(否定的事例)を重視することなどにより、確実な知識を得ようとするための、真の帰納法を提示しようと試みたのです。

デカルトの方法的懐疑

ルネサンス時代以後、自然科学の目覚ましい成果に基づいて、十七世紀の哲学は機械的自然観を絶対的な真理と考え、これと矛盾しないように努めました。そして機械的自然観をより根源的なものから基礎づけようとしたのが合理論であり、その代表者がデカルト(Rene Descartes, 1596-1650)でした。

デカルトは数学的方法を唯一の真なる学問的方法であると考え、数学におけるように、まずだれにとっても明らかな直感的真理を求め、それを基礎として、新たな確実な真理を演繹的に展開しようとしたのです。

そこで哲学の出発点となる直観的真理をいかにして求めるかということが問題になります。彼は一切の知識の原理となるべき絶対的な真理を探究するために、疑える限りすべてのことを疑ってみたのです。そして彼は、一切を疑ってみても、私たちが疑いながら存在しているという、その事実だけは疑いえないということに気づいたのです。彼はそのことを「われ思う、ゆえにわれあり」(Cogito, ergo sum)という有名な命題で表しました。ところで、この命題がなぜ、何の証明も必要な確実な命題なのかといえ、それは明晰かつ判明であるからだと思いました。そして、そこから「われが明晰判明に理解するところのものはすべて真である」という一般的な真理の基準を導いたのです。

デカルトの懐疑は、懐疑のための懐疑ではなくて、確実な真理を発見するための懐疑であって、これを「方法的懐疑」といいます。デカルトは明晰判明に直観される公理から出発して、個々の命題を証明していく数学的方法に倣って、確実な知識を得ようとしたのです。

ヒュームの経験論

デカルトを代表とする合理論に対して、精神的なものを、経験的に得られる自然法則に基づいて説明していこうという立場をとったのが、イギリスを中心として発展した経験論でした。

ヒューム(David Hume, 1711-76)は「諸学の完全な体系」を見いだすために、「真理を確立するための新たな方法」により、心的現象を客観的に分析したのです。そしてヒュームは、心的世界の不変なる自然的な法則を見いだすことによって、私たちの心の関係するあらゆる世界、つまり諸学の根底を明らかにしようとしたのです。

ヒュームは心的世界の要素である観念を分析しました。彼は類似、接近、因果性という連合作用によって、単純観念から複合観念が生じると考えたのです。そのうち観念の類似と観念の接近は確実な認識なのですが、因果性は主観的な信念にすぎないと思いました。

その結果、ヒュームの経験論は、のちに経験と観察による帰納的推理からは客観的な知識は得られないという懐疑主義に陥ったのです。そして一切の形而上学を否定したのはもとより、自然科学すら確実でないと考えるに至ったのです。

カントの先験的方法

合理主義哲学と自然科学の立場から出発したカント(Immanuel Kant, 1724-1804)は、「ヒュームが独断のまどろみから私をゆりうごかした」といっているように、ヒュームの因果性概念の批判を契機として、因果性の概念がいかにして客観的な妥当性をもちうるかを問題にせざるをえなくなったのです。ヒュームがいうように、因果性の概念が主観的な信念にとどまるものならば、因果律は当然、客観的妥当性を失い、したがって因果律を中心に立てられている自然科学は、客観的妥当性をもつ真理の体系ではなくなるからです。

そこでカントは、いかにして経験一般は可能であるかということ、客観的真理性はいかにして得られるのかを問題としました。そのことを明らかにしようとするのが彼の先験的(transzendental)な方法なのです。

認識がすべて経験的なものであれば、ヒュームのいうように、私たちは決して客観的真理に

到達することができません。そこで客観的真理性はいかに得られるのかを追究したカントは、人間の理性を批判的に検討することにより、私たちの主観の中に先天的(アプリアリ)な要素ないし形式が存在するということを発見しました。すなわちカントは一切の経験に先立って、すべての人間に共通な、先天的な形式が存在することを主張したのです。先天的形式とは、時間と空間の直観形式と、純粹悟性概念(カテゴリー)でした。そして対象をあるがままの姿において把握することによって認識が成り立つのではなく、主観の先天的形式によって、認識の対象は構成されるものであるとしたのです。

ヘーゲルの観念弁証法

カントの方法はいかにして客観的な真理の認識が可能になるかということを目指したものでありましたが、ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831)の方法は、認識の発展過程としての弁証法であり、それがそのまま存在の発展論理として展開されたのです。

カントは客観的な真理性を保証するためにアプリアリな概念を見いだしましたが、ヘーゲルは、概念はアプリアリでありながら、自己を越えて自己運動すると見たのです。すなわち概念は概念を直接的に肯定する立場から、その概念とは相反する規定(対立)つまり否定が存在することを知るに至り、そしてこの矛盾する二つの規定を止揚(aufheben)して、総合統一する新しい立場、つまり否定の否定の立場に発展していくのです。

ヘーゲルはこの肯定、否定、否定の否定の三つの段階を、即自(an sich)、対自(fur sich)、即自対自(an und fur sich)と名づけました。この三段階は正・反・合、または定立・反定立・総合ともいわれています。

ヘーゲルは概念の自己展開の推進力となっているものを「矛盾」とであると見たのです。彼は、「矛盾は、あらゆる運動と生命性の根本である。ある物は、それ自身の中に矛盾をもつかぎりにおいてのみ運動するものであり、衝動と活動性をもつのである」と述べました。そのように矛盾を推進力とする自己運動の論理が、ヘーゲルの弁証法の根本を成しているのです。

そしてヘーゲルは、概念は自己発展して理念に至り、概念(理念)は自己を否定し、外化して自然として現われ、さらに人間を通じて精神として発展していくというのです。したがってヘーゲルの弁証法は概念の発展の方法であると同時に、客観的世界の発展の方法でもありました。

マルクスの唯物弁証法

近代において弁証法を発展させたのはドイツ観念論であり、ヘーゲルがその頂点でした。しかしヘーゲルの弁証法は観念論のために歪められているとして、マルクス(Karl Marx, 1818-83)はヘーゲルの観念弁証法を逆立ちさせて、唯物論の立場から弁証法を再構成したのです。エンゲルス(Friedrich Engels, 1820-95)によれば、マルクスの弁証法は「自然、人間社会および思考の一般的な運動・発展法則に関する科学」であるが、自然と社会の発展の方法の基礎になっているだけでなく、思考の発展もそれに基づいたものであるというのです。

ヘーゲルの観念弁証法もマルクスの唯物弁証法も、共に正反合の三段階の展開過程として理解される矛盾の弁証法でもあります。矛盾とは、一つの要素が他の要素を排斥(否定)しながらも、相互の関係を維持する状態ですが、ヘーゲルの弁証法の場合、矛盾の概念は総合(統一)に重点が置かれているのに対して、マルクスの弁証法における矛盾の概念は、一方が他方を打倒、撲滅させるというような闘争の意味が加えられています。

エンゲルスによれば、唯物弁証法の基本法則は、①量から質への転化の法則、②対立物の統一と闘争の法則(対立物の相互浸透の法則)、③否定の否定の法則、の三つです。

第一の法則は、質的な変化は量的な変化によって起きるが、量的変化がある一定の段階に達するとき、飛躍的に質的变化が起きるというのです。

第二の法則は、事物の中にある対立物が、一方では互いに相手を必要としながらも、もう一方では互いに排斥し合うなかで、つまり対立物の統一と闘争によって、事物の発展と運動がなされるということです。

第三の法則は、事物の発展において、古い段階が否定されることによって新しい段階に移り、それが再び否定されることによって第三の段階に移りますが、この第三の段階への移行は、高い次元における初めの段階への復帰であるといえます(これを「螺旋形の発展」といいます)。

エンゲルスがこの三つの法則を示す際に、ヘーゲルの「論理学」を参照していますが、第一法則は「有論」で、第二法則は「本質論」で、第三法則は「概念論」で展開されたと見ているのです。

唯物弁証法の三つの法則の中で、最も核心的なのが、第二の「対立物の統一と闘争の法則」です。そこにおいて、対立物の統一と闘争が矛盾の本質であるといいますが、実際は統一よりも闘争にずっと比重を置いているのです。事実、レーニン「対立物の統一(一致・同一性・均衡)は条件的、一時的、経過、的、相対的である。たがいに排斥しあう対立物の闘争は、発展、運動が絶対的であるように、絶対的である」といい、さらには「発展は対立物の闘争である」とまでいって、闘争を強調しているのです。

フッサールの現象学的方法

フッサール(Edmund Husserl, 1859-1938)は一切の諸科学の基礎を実現する基礎学(Grundwissenschaft)すなわち第一哲学として現象学(Phänomenologie)を提唱しました。現象学は、諸科学の理論を構成する意識そのもの、認識を遂行する意識そのものを問題としています。デカルトの「われ思う」(コギト)という絶対的現実性を出発点とし、従来の哲学の根底に潜んでいる形而上学的な独断を排しつつ、厳密な学として、意識の本質を考察したのです。そして一切の先入観を排しながら、純粋な意識を直感的に明らかにしようとしたのです。

そのために「事象そのものへ！」(Zu den Sachen selbst!)をモットーとしたのです。ここで事象とは、経験的事実をいうのではなく、一切の先入観を排除した事実そのものをいうのです。フッサールの現象学は、経験的な事実から経験的なものを排除し、本質的な現象を直観する段階を経て、その外界の対象の本質を内在的な本質に転換させたのち、先験的な純粋意識の構造を分析し、記述するものです。

私たちの前に横たわっている自然的世界を、自明なものと見なす日常的な態度を「自然的態度」(Natürliche Einstellung)といいます。しかし自然的態度には、根深い習慣性や先入観が働いているのであって、自然的態度によって認識される世界は、事象そのものの世界であるとはいえません。そこで「自然的態度」から「現象学的態度」へ移行しなくてはならないのですが、そのためには「形相的還元」と「先験的還元」という二つの段階を通過しなくてはならないのです。事実の世界から本質の世界へ移ることを、フッサールは「形相的還元」(eidetische Reduktion)といいます。そのときなされるのが「自由変更」(freie Variation)による「本質直感」(Idéation)です。つまり、存在する個々のものを自由な想像によって変化させてみて、それでも変わらない普遍的なものが直観されるとき、それが本質なのです。例えば花の本質は、バラ、チューリップ、つぼみ、しおれた花などについて検討し、それらにおいて不変なるものを取り出すことによって得られるのです。

次になされるのが「先験的還元」(transzendente Reduktion)です。それは外界の存在が現実であるか否かということに関して、判断を停止させることによってなされます。それは外界の存在を否定するとか、疑うことではなく、ただ「判断中止」(epoche)あるいは「括弧入れ」(Einklammerung)を行うだけです。

そのとき、括弧に入れられないで(排除されないで)、残ったものが「純粋意識」(reines Bewusstsein)あるいは「先験的意識」とされています。そしてその中に現れてくるのが「純粋現象」

(reines Phänomen)です。このような純粋現象を把握する態度が現象学的態度なのです。

純粋意識の一般的構造を研究してみると、純粋意識は志向作用であるノエシスと、志向される対象であるノエマから成り立っていることが分かります。その関係は、考えるものと考えられるものの関係とっていいのです。このように現象学は純粋意識の内在的本質すなわち純粋現象を忠実に記述しようとしたものなのです。

分析哲学の言語分析

現代の欧米で哲学の主流の一つになっているのが分析哲学です。分析哲学とは、一般的に言語構造の論理的な分析に哲学の主要な任務があると考ええる立場なのです。これを初期の論理実証主義(logical positivism)と後期の日常言語学派(ordinary language school)の二つの立場に分けることができます。

世界は究極の論理的単位である原子的事実の集まりであるという論理的原子論(logical atomism)を唱えたラッセル(Bertrand Russell, 1872-1970)やヴァイトゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein, 1889-1951)の影響を受けて、ウィーンの哲学者シュリック(Moritz Schlick, 1882-1936)やカルナップ(Rudolf Carnap, 1891-1970)を中心にして形成されたのが論理実証主義(別名ウィーン学派)です。

論理実証主義は、経験的知覚によって検証されるものだけが正しい知識であると主張します。ところで、事実についての研究はすべて科学が行うべきものです。そこで哲学の使命は、言語の論理的分析を通じて、日常の言語表現のもっている曖昧性を取り除くことなのです。そして従来の言語を捨てて、すべての科学に共通な一つの理想的な人工言語の確立を目指したのです。それは物理学が用いる数学的言語、物理学言語であって、そのような理想言語によって諸科学の統一を図ろうとしたのです。論理実証主義の旗印は、反形而上学、言語・論理の分析、科学主義でした。

ところが、科学的知識ですら検証されない命題に基づいていること、論理実証主義の主張自体が一つのドグマであることなどが分かり、論理実証主義の限界が現れるようになりました。そこで、ムーア(George Edward Moore, 1873-1958)やライル(Gilbert Ryle, 1900-76)を中心として日常言語学派が成立することになったのです。

日常言語学派も、哲学の任務は言語の論理的な分析であると考えますが、理想的な人工言語の構成を断念し、日常言語に基づいて概念の意味を明らかにし、論理構造を見いだすことをその任務としたのです。そのようにして、反形而上学的態度も緩和されました。

二 統一方法論(授受法)

統一思想の方法論は、統一原理に基づいた方法であって、統一方法論といいます。これはまた、従来の方法論を統一した方法論という意味もあります。統一方法論の基本的法則は「授受作用の方法」ですが、簡単に「授受法」といいます。

(一) 授受法の種類

授受作用は、主体と対象の間の相互作用ですが、この作用にはその契機となる中心があります。そして中心がいかなるものかによって、授受作用の性格が決定されます。真情を中心として授受作用が行われるとき、主体と対象が合性一体化して生じる授受作用の結果は合性体となります。ところが心情によって目的が立てられ、目的を中心として授受作用が行われる時、繁殖体または新生体が生じるのです。

原相において、四位基台は神様の属性の構造を扱った概念ですが、それは心情(または目的)を中心に、主体と対象、そして合性体(または繁殖体)からなる四位の構造です。これを時間的に見れば、中心である心情(または目的)が先にあり、これを起点として、主体と対象が授

受作用を行い、その結果、合性体または繁殖体(新生体)が形成されるのです。そのとき中心である心情を「正」といい、主体と対象が分立して、互いに相対する意味で、その主体と対象を「分」といい、合性体または新生体として現れる結果を「合」といいます。そしてこの授受作用の全過程を正分合作用といっています。

正分合作用の「分」は分けるという意味ではありません。すなわち「正」が半分に分かれるというのではなくて、正を中心として、二つの要素が互いに相対するという意味なのです。神様における分とは、唯一なる神様の相対的な二つの属性が相対するようになることを意味するのです。その二つの相対的な属性が、正を中心として授受作用を行い、合となって一つになるのです。授受作用には自同的授受作用、発展的授受作用、内的授受作用、外的授受作用の四種類があります。そしてそれらに対応して、自同的四位基台、発展的四位基台、内的四位基台、外的四位基台の四種類の四位基台が形成されます。

自同的授受作用と発展的授受作用

神様の属性の間に行われる授受作用には、心情を中心として性相と形状が授受作用を行って、中和体または合性体を成して永遠に存在するという自己同一的な不変なる側面と、目的(創造目的)を中心として性相と形状が授受作用を行って、繁殖体または新生体である被造物を生ずるという発展的な側面があります。前者が自同的授受作用であり、後者が発展的授受作用です。被造世界のすべての存在も、それと同様に、自同的授受作用と発展的授受作用を行っており、不変な側面と発展する側面を同時にもっています。

宇宙の姿は相対的に、おおむね変わらないと見られています。銀河系は宇宙の中心を回りながらも、いつも同じ凸レンズ型の姿を保っています。その中で太陽系は銀河系の中心(核恒星系)を2億5千万年の周期で回っていますが、太陽系は銀河系の中心からいつも同じ相対的位置にあります。また太陽系の円盤状の形も不変です。太陽系には九つの惑星が太陽を中心として回りながら、それぞれ不変なる軌道を保っています。そして各惑星は一定の特性を維持しています。このように、宇宙には不変なる側面つまり自己同一的な側面があります。

ところが宇宙も、約150億年という長い期間を通じて見れば、発展し成長していることが分かります。そのことを科学者たちは、宇宙が膨張するとか進化すると言っています。宇宙はガス状態から固体状態へ変わりながら、無数の大小の天体が形成されたのであり、惑星の一つである地球上には、植物、動物、人間が現れました。この宇宙の変化過程は、一種の成長の過程つまり発展過程と見ることができます。このように宇宙は、自己同一性と発展性の両面性をもっているのです。

生物の場合もやはり、自己同一性を保ちながら発展しています。例えば植物は、種子が芽を出し、茎が伸び、葉が出て、花が咲き、果実が実るなどの過程を経ながら成長し、変化します。そうでありながら、特定の植物であるという面においては、いつも不変性を維持しているのであり、毎年同じ花を咲かせ、同じ果実を実らせているのです。つまり植物は自己同一性(不変性)と発展性(変化性)を共にもっているのです。動物も、同様に自己同一性を保ちながら発展(成長)しています。

人間の社会においても同様です。歴史上には今日まで多くの国家が興亡盛衰を重ねてきました。しかし主権者と国民が主体と対象の関係を結んでいるという国家の基本形は、いつの時にも、またどこにおいても、不変だったのです。家庭の場合も同じです。家庭は環境と時代によって多様な姿を示しながらも、父母と子女の関係、夫と妻の関係などは不変なのです。人間個人を見ても、絶えず成長しながら一生を通じて変わらない個人としての特性を維持しているのです。

このように授受法においては、すべての存在は不変性と発展性(可変性)が統一をなしているのです。

内的授受作用と外的授受作用

神様の性相の内部では、心情を中心として内的性相と内的形状が内的授受作用を行って合性体を成しています。そのとき形成されるのが内的四位基台であり、それがすなわち神様の内部構造なのです。次に性相と形状が外的授受作用を行って合性体を成していますが、そのとき形成されるのが外的四位基台です。ここに心情の位置に目的が立てられれば、授受作用が動的、発展的な性格を帯びてきます。そのとき内的四位基台において、新生体としてロゴス(構想)が形成され、外的四位基台において、新生体として被造物が形成されるのです。

神様におけるこのような内的四位基台と外的四位基台の二段構造は、そのまま被造世界にも適用されます。人間と万物(自然)の関係において、人間は内的授受作用によって思考し、構想を立てますが、同時に外的授受作用によって、万物を認識し、主管します。人間において、心の中の生心と肉心の授受作用が内的授受作用であり、人間と人間の授受作用、例えば家庭における夫と妻の授受作用は外的授受作用です。また家庭における家族同士の交わりを内的授受作用とすれば、社会における対外的な他人との交わりは外的授受作用なのです。

一つの国家を見ても内外の授受作用があります。国内において政府と国民が主体と対象の立場で関係を結び、政治や経済が営まれています。これは内的授受作用です。同時に、他の国家との間に、政治的、経済的な関係が結ばれていますが、それは外的授受作用です。万物世界においても、内的授受作用と外的授受作用があります。太陽系において、太陽と惑星との間に内的授受作用が行われており、同時に、太陽系は他の恒星との間に、外的な授受作用を行っています。また、地球の内部における授受作用を内的授受作用とすれば、地球と太陽の授受作用は外的授受作用となります。生物体において、個々の細胞内では核と細胞質による内的授受作用が行われており、同時に細胞同士は外的授受作用を行っています。

このように、人間相互間においても、人間と万物の関係においても、万物世界においても、内的授受作用と外的授受作用が、いつでも統一的行われているのです。そして、これらの内外の授受作用が円満に行われることによって、事物は存在し発展しているのです。

ここで演繹法と帰納法と、統一方法論の関係について述べられています。演繹法は、人間の心の中で行われる内的授受作用による論理の展開の方法です。それに対して帰納法は、外界の事実を吟味していく方法であって、外的授受作用に基づいています。ところで統一方法論においては、内的授受作用と外的授受作用は統一的行われています。したがって、演繹法と帰納法は別れたものではなくて、統一的になされるものなのです。

(二) 授受法の範囲

授受法は神様と人間と万物(自然)における存在と発展の根本的な方法です。まず神様は内的および外的な自同的授受作用によって永遠性を維持しつつ、内的および外的な発展的授受作用によって、人間と万物を創造されました。

人間や万物においても、それぞれの個体(個性真理体)は、それ自体の中で主体と対象の相対的要素が内的な授受作用をしながら、同時にまた他の個体と外的な授受作用をすることによって、存在し発展しています。

個体同士の授受作用には、次のようなものがあります。まず人間相互間の授受作用があります。それは家庭生活や社会生活における、人間と人間の交わりです。教育、倫理、政治、経済活動などがこの授受作用によって営まれています。

次は、人間と万物の授受作用を見えます。ここには、人間が万物を主管する場合の授受作用と、人間が万物を認識する場合の二つの授受作用があります。万物の認識の場合の授受作用の例は、自然科学の基礎研究、自然の探求や鑑賞などがありますが、万物主管の例は、自然科学における応用研究、企業活動、経済活動、芸術の創作活動などがあります。

さらに、万物相互間にも授受作用が行われています。原子と原子の授受作用、細胞と細胞

の授受作用、星と星の授受作用などがその例です。そのように万物世界では数多くの個体が、それぞれ一定の位置において相互に授受作用を行うことによって、有機的、秩序的な世界を成しているのです。機械における部品と部品の相互作用も、その一例です。

人間の思考や会話も授受法によって営まれています。すなわち、思考における主体的な部分(内的性相)である知情意の機能と、対象的部分(内的形状)である観念、概念、法則、数理が授受作用をすることによって思考が営まれています。

思考における判断(命題)も授受法に従っています。例えば「この花はバラである」という判断は、「この花」と「バラ」という二つの観念を比べる対比型の授受作用なのです。会話も授受法に従っています。もし相手がでたらめに話せば、聞く人は彼が何を言っているのか理解できないのです。私が相手の言うことを理解できるのは、相手のもっている観念や概念が、私のもっている観念や概念と一致しているからであり、相手と私の思考の法則が一致しているからなのです。これも対比型の授受作用です。

(三) 授受法の類型

授受法には、次のような5つの類型があります。

- ① 両側意識型
- ② 片側意識型
- ③ 無自覚型
- ④ 他律型
- ⑤ 対比型(対照型)

これらについては、存在論で説明されています。

(四) 授受法の特徴

授受法には、次のような7つの特徴があります。

- ① 相対性
- ② 目的性と中心性
- ③ 秩序性と位置性
- ④ 調和性
- ⑤ 個別性と関係性
- ⑥ 自己同一性と発展性
- ⑦ 円環運動性

これらについても、存在論において説明されています。

三 統一方法論から見た従来の方法論

以上の統一方法論をもって、従来の方法論を評価してみることにします。

ヘラクレイトスの弁証法(運動法)

ヘラクレイトスは、「万物は流転する」といいました。彼は、被造世界における発展的な側面のみをとらえ、自己同一的な側面を軽視したか、見逃したといえます。また彼は「闘争は万物の父である」といい、万物の発展の原因を対立物の闘争に求めています。万物は相対物の調和的な授受作用によって発展するというのが統一方法論の立場です。

ゼノンの弁証法(静止法)

まずゼノンの「飛矢静止論」について考察してみます。飛んでいる矢がある点で静止しているというとき、その点は空間をもたない数学的な点を意味しているといえませんが、矢の実際

の運動は、時間、空間の中で行われています。物体の運動する速度(v)は空間中の距離(s)を時間(t)で割ったものであり、 $v=s/t$ で表されます。ですので、物体の運動は、一定の時間と一定の距離において考えなければなりません。位置だけあって空間のない点(数学的な点)において、物体の運動を論ずることはできないのです。ですので、ある点における物体の運動をいうとき、その点がいかに微小であっても、一定の空間のもとで考えるべきであり、またある瞬間における運動をいうとき、その瞬間がいかに微小であっても、一定の時間において考えなくてはならないのです。そうすれば、運動している物体は静止することなく、ある点を通過することがはっきりといえるのです。

この問題に関して唯物弁証法は、物体はある瞬間にある場所にありながら、同時にないと主張して、ゼノンのパラドックスを解決し、運動を説明したといえます。しかし、これもゼノンと同様に詭弁にすぎません。運動している物体の位置は時間の関数で表されるのであって、「一定の瞬間」には必ず「一定の場所」が一对一に対応しています。したがって「ある瞬間」に「ある場所」にあって、同時にないということはありません。

結局、運動している物体は(1)静止することなく空間を通過しているのであり、(2)ある瞬間に、ある場所に、運動しつつ「ある」のです。

次は「アキレスと亀」ですが、ゼノンは時間を見捨て空間のみで議論したので、アキレスが亀を追い越せないという誤った結論に達したのです。一定の時間の経過から見れば、アキレスは確実に亀を追い越すことができるのです。

ゼノンは、すべてのものは不変不動であり、不生不滅であることを論証しようとした。そのために、詭弁までも用いて運動や生滅を否定しようとしたのです。ゼノンはヘラクレイトスとは逆に、事物の発展的側面を見捨て自己同一的側面のみをとらえたといえます。

ソクラテスの弁証法(対話法)

ソクラテスは、人と人が謙虚な心でもって対話することによって真理に到達できると考えました。これは、人と人との間の外的発展的授受作用による真理の繁殖です。ソクラテスは、人と人との間の正しい授受作用のあり方を説いたのです。

プラトンの弁証法(分割法)

プラトンは、イデアの世界について研究しました。原相論において、原相の内的形状にはいろいろな観念や概念があることを明らかにしましたが、プラトンはそれらの概念の世界をイデア界としてとらえ、分析と総合の方法によって、イデア界のヒエラルキー構造を明らかにしようとしたのです。概念の分析や総合は、概念と概念を比較することによってなされます。これは、対比型の授受作用であり、人間の心の中で行われるので内的授受作用です。結局、プラトンのイデア論は、対比型の内的授受作用の一側面を説いた理論であったのです。

アリストテレスの演繹法

アリストテレスの演繹法は、三段論法です。まず普遍的真理を立て、次にそれより限定された真理を述べて、それから結論を出します。先の例で言えば、「すべての人間は死すべきものである」という大前提と、「ソクラテスは人間である」という小前提を対比して、「ソクラテスは死すべきである」という結論を出します。これは、命題と命題の間の対比型の授受作用です。

さらに「ソクラテスは人間である」という命題自体、「ソクラテス」と「人間」を対比して得られるものである、これも対比型の授受作用です。したがって、アリストテレスの演繹法は、プラトンの場合と同様、対比型の内的授受作用による真理の追究の方法であるといえるのです。

ベーコンの帰納法

ベーコンは真理を得るためには、まず偏見(イドラ)を捨てて、実験と観察によらなければならないと主張しました。A, B, C……の実験の結果がすべてPであれば、Pという結論を一般的法則として見なすというのが帰納法です。帰納法は、人間と万物(自然)との外的授受作用に基づいて真理を得ようとする立場です。また実験と観察によって得られた多くの事実を対比して結論を得るので、対比型の授受作用です。したがってベーコンの帰納法は、対比型の外的授受作用による真理の追究の方法であるといえるのです。

デカルトの方法的懐疑

デカルトは一切のものを疑ってみて、その結果、「われ思う、ゆえにわれあり」という確実な第一原理に達したといいます。ここでデカルトが一切のものを疑ったということは、すべての万物や現象を否定したことを意味し、したがって統一思想から見れば、神様の宇宙創造以前の段階にさかのぼるのと同じ立場にあるといえます。その状況において「われ思う」は宇宙創造直前の神様の構想や考えに相当します。

デカルトは「われ思う、ゆえにわれあり」という前に「われはなぜ思うか」を問うべきだったのです。そうすれば彼の理性論は、のちに彼の後継者によって独断論に陥らなかったはずなのです。とにかく、この「われ思う、ゆえにわれあり」の自覚は、統一思想から見れば、人間の心の中でなされる内的授受作用は確実な認識であるという意味なのです。

またデカルトは、上記の第一原理から「われわれが明晰かつ判明に理解するところのものはすべて真である」という一般的な真理の基準を導きましたが、これは内的発展的四位基台の形成による真理の繁殖を肯定する命題なのです。

ヒュームの経験論

ヒュームは因果性を主観的な信念にすぎないとしましたが、因果性はヒュームが主張するように主観的なものだけではなくて、主観的であると同時に客観的でもあるのです。そのことについては、認識論で明らかにされています。ヒュームはまた、物質的な実体を否定しただけでなく、精神的な実体(自我)をも否定し、存在するものは観念の束にすぎないとしたのです。統一思想から見れば、彼は内的形状(観念)だけを確実なものを見たといえます。ヒュームは心的現象を分析することにより、哲学の完全な体系をつくらうとしましたが、ばらばらの印象や観念のみによって、それをなそうとしたところに問題があったのです。

カントの先験的方法

カントは、対象から来る混沌とした感性的内容が、主観(主体)のもつ先天的形式によって構成されることによって、認識が成立すると主張しました。人間主体(主観)と対象の相対関係によって認識が成立するという点では、統一思想も同じです。しかし統一思想から見れば、主体は形式(思惟形式)だけでなく内容(映像)も備えているのであり、両者を合わせて原型といいます。また対象から来るのは、混沌とした感性的内容ではなくて、存在形式をもった内容です。カントの構成論に対して、統一思想は照合論を主張します。カントの先験的方法に基づいた構成論は、統一思想の授受法に基づいた照合論を、カントの立場から表現したものであると見ることができます。

ヘーゲルの概念弁証法

ヘーゲルは、概念と世界(宇宙)の発展を矛盾の止揚と統一の過程として、あるいは正反合の過程としてとらえました。しかし、統一思想から見れば、矛盾によって発展するわけではありません。発展は主体と対象の関係にある相対物が、目的を中心として授受作用することによって

発展するのであり、その過程は正分合となります。そのとき正は目的を、分は相対物を、合は合性体または繁殖体を意味します。

ヘーゲルのように、概念が概念自体の矛盾によってひとりでに発展するものではありません。内的性相であり知情意の機能が内的形状(観念、概念など)に作用し、新しい概念(思考)を形成しながら思考が発展していくのであり、これは論理学で説明されているように、思考の螺旋形の発展に相当します。統一思想の主張する相対物の授受作用による発展を、ヘーゲルは対立する要素の相互作用という立場から誤ってとらえたのです。

マルクスの唯物弁証法

マルクスは、物質的存在のあり方を基礎として精神作用はその反映であるとしましたが、統一思想から見れば、性相(精神)と形状(物質)は主体と対象の相対的な関係にあるので、精神的な法則(価値法則)と物質的な法則には対応関係があるのです。

「量から質への転化の法則」に対しては、統一思想は「質と量の均衡的發展の法則」を代案として提示します。量から質へではなく、また量的変化がある一点に達するとき、飛躍的な質的变化が起きるのでもありません。質と量の関係は性相と形状の関係であり、質と量は同時的、漸次的、段階的に変化するのである。

「対立物の統一と闘争の法則」に対しては、統一思想は「相対物の授受作用の法則」を代案として提示します。対立物の闘争は破壊と破滅を生じるのみであって、決して発展をもたらさないのです。すべての事物は、共通目的を中心とした相対物の調和的な授受作用によって発展するのである。

「否定の否定の法則」に対しては、統一思想は「肯定的發展の法則」を代案として提示します。自然や社会は、それを構成している主体と対象の相対的要素が円満な授受作用を行うことによって、肯定的に發展しているのです。そして自然界において、無生物は空間的円環運動を行い、生物は時間的円環運動(螺旋形運動)を行っているのです。

今日までの方法論のなかで、マルクスの唯物弁証法ほど大きな影響力をもったものはありませんでした。マルクスの提示した弁証法が自然の發展においても有効であることを証明しようとして、エンゲルスは8年間、自然科学を研究した結果、「自然は弁証法の検証である」という結論を下したのでした。しかし今日に至り、唯物弁証法の間違いは明白なものとなりました。そして自然現象の内容をよく検討してみれば、自然は「弁証法の検証」ではなく「弁証法の否定」であり、かえって「授受法の検証」であることが明らかになったのです。

フッサールの現象学的方法

フッサールは、まず自然的世界の事物から出発していますが、事物とは、統一思想から見れば、性相と形状の統一体です。そして形相的還元によって本質直観を行うといいますが、本質は存在者の性相に相当します。さらにフッサールは、判断を中止して意識(純粋意識)を分析して見れば、ノエシスとノエマの構造があるといいますが、これは統一思想から見れば、性相(心)の内部構造である内的性相と内的形状にそれぞれ対応するのである。

フッサールもデカルトと同様に、無意識のうちに、統一思想の内的四位基台に関する内容を重要視して、その分析によって学問を統一しようとしたことができます。

分析哲学の言語分析

言語は、内的發展の授受作用によって形成されますが、内的授受作用には理性を中心とした知的な面(ロゴスの側面)と、情感を中心とした情的な面(パスト的側面)があります。分析哲学は、そのうちロゴスの側面だけをとらえて論理性のみを追究したのです。統一思想から見るとき、言語は本来、愛を実現するためのものであって、言語の論理構造は、愛の実現のために

必要な一つの条件にすぎないのです。

ところで言語の営みは、思想の形式であり、それは一種の創造活動です。創造活動の中心になっているのは心情です。したがって、愛を中心とする情的な要素が思想形成に際して主体的な役割をなしているのです。ところが、分析哲学は終始一貫して、言語の論理的な分析だけに重きを置くあまり、言語を通じて形成される思想の創造的側面や心情的、価値的側面を無視する結果になったのです。